

# 講義「超越の人間学」より

福原浩之

## 第1節 はじめに

立命館大学文学部教授山本昌輝先生は、今年度をもって定年でご退職される。本稿は、その記念に刊行される先生の「立命館文学退職記念論集」のために執筆されたものである。先生は、過去二十年にわたり立命館大学において研究・教学の発展に尽力されてきた。特に、教育人間学専攻および専修における心理健康領域の担当教員として、ご専門である臨床心理学および臨床人間学の分野で独自の貢献をされてきた。

筆者は、先生より賜った有形・無形の学恩に応えるべく努力して来たが、特に本稿では先生より引き継ぐことになった講義科目である「超越の人間学」に関する講義録を呈することによって、先生からの最後の厳しいご批判を仰ぎたいものと思う。今世紀の始まりに洛北衣笠の地に招集された「心の実家」の末弟が「兄からバトンを受け取った講義の中で今はこんなことを話しています」という報告として、ご笑納頂ければ幸いである。

(始業のチャイム)

皆さん、お早うございます。それでは早速、今日の講義を始めていきましょう。

この講義は、「超越」をテーマにお話することになっていますが、皆さんは超越と聞くといったいどのようなことを思い浮かべられるでしょうか？

もし、よければ少し時間を取りますので、コミュニケーションペーパーに記述してみてください。ネットの方はチャット機能を使って送信して下さいがあればありがたいです。

それでは、いくつか皆さんのお考えを紹介してみましょう。

「自分より上の次元のもの（神）とつながるといような宗教的なものです。」

「何やら神秘的、聖域に足を踏み入れてしまう、というイメージが浮かんだ。」

「高校の時に習った倫理のカントのことを思い浮かべた。超越的と超越論的。」

「サルトルの提唱する実存主義的な生き方をしているというイメージがあります。」

「ウルトラマンの授業でもするのかなと思いました。」

「ドラゴンボールである。孫悟空がスーパーサイヤ人になる描写が超越に似合う。」

「身体面における自己の記録の更新である。」

「自己肯定感を高める事だと考えます。」

いかがですか。なかなかユニークな回答もありましたね。皆さんは、他の受講生の回答を聞いて

どのように感じられたでしょうか？

実は、私がこの講義を引き継ぐことになった時、正直、「これは困ったことになったぞ」と、しばらくの間、深く悩んでしまいました。というのも、皆さんが書いて下さった回答からもわかるように、この「超越」というテーマは「宗教」や「哲学」との関連で論じられることが一般的です。それを「教育と…?」、しかも「教育人間学と…??」、さらに「心理健康領域と…???」。これは、私にとってかなりの難題でした。とはいえ何事もやってみなければ始まりません。早速、始めてみましょう。

## 第2節 超越とは何か

「超越」は、ラテン語の「超えて」(trans-)と「のぼる」(scandere)に由来し、ある領域を超出するものやその働きをさす言葉です。西洋思想史では、絶対者である神の観念や超越と対になる内在と関係づけられて議論されてきました。

まず、それを宗教学の事典を参考にしながら簡単に見ておきましょう。

### 【古代・中世】

プラトンは、現実世界を超越したアイデアを考え、哲学の使命は知性の働きにより存在の諸階層を超えて、アイデアのアイデアと呼ばれる善のアイデアに達することであるとしました。彼の善を一(ト・ヘン)と呼んだプロティノスにとって、一は思惟と存在を超越したものでした。

キリスト教は、永遠にして無限なる絶対者・超越的神を説きます。アウグスティヌスは、存在を超えた神ではなく自己を超え存在そのものとして自己の内奥に出会う神を説きます。

### 【近代】

デカルトは、実体を無限実体である神と有限実体である精神と物体に分け、世界に対する神の超越を主張します。これに対して、スピノザは、神は世界の超越的創造者ではなく、世界に内在する唯一の実体であると説きます。

カントは、超越的と超越論的を区別し、経験の彼方に超越する神や絶対者を認識の対象とすることを戒めました。

ヘーゲルは、神＝絶対者は、歴史に自己展開する主体／精神であり、それを思弁で把握することをめざします。彼を批判したキルケゴールは、絶対者に対する逆説的信仰を説きました。また、バルトは、絶対他者としての神を語りますが、愛ゆえに世界の超越を放棄したイエス・キリストを通しての神と人間の和解を説きます。

### 【現代】

ハイデガーは、超越の運動が人間に固有の態度・姿勢であるとし、これを他者不在の全体性の哲学であると批判したレヴィナスは、神は主体に現前し得ない無限であるがゆえに超越であるとし、

西田幾多郎は、神＝絶対を世界と対立的に捉える立場を批判し、真の絶対はその絶対を自己否定的にもち、真に内在的であると同時に真に超越的なものとして現実の根底で働くとし、彼にとって、超越の問題は、絶対矛盾的自己同一において成立します。

### 第3節 教育人間学における超越とは何か

以上のように、「超越」の問題は、宗教的にも、哲学的にも、さまざまな思索を経てきた概念であり、それらのどれか一つを取り上げて整理し正確に理解するだけでも、おそらく十五回の講義だけでは足りないと思います。

そこで、この講義では筆者が過去二十年にわたる教育人間学研究の中で見出したことを取り上げ、それを教育人間学における超越の問題として体験的人間学の立場から提示してみたいと思います。体験的人間学とは、筆者とそのゼミナールの受講生を中心に共同生成してきた教育人間学研究の新たな展開の一つです。当初は体験的教育人間学と呼称していましたが、これだと専攻におけるすべての教育人間学的研究が体験的なものであると誤解されかねないので、最近ではこのように呼ぶことにしています。

さて、この大学に着任して以来、私の研究関心は、実存的で主体的な苦悩の真只中にある青年期の大学生・大学院生が抱える具体的で個別的な人間学的課題（恋愛・就職・家族・病・親子関係など）、つまり、従来の教育人間学研究においてはほとんど全く省みられることも無かった諸課題に対して、実際に理解と癒しと再生がもたらされるような原理と方法の探究にありました。

最初はまったくの暗中模索で自分がどこに向かっているのか定かでなく、加えてそれまでに作り上げてきた実験心理学者としてのアイデンティティが拡散し、「なぜ不惑の年にも関わらず、このような惑いの真只中にあるのか？」と、何度も首を傾げたものです。

しかし、どうにかこうにかその後の約十年にわたる体験的な研究の結果、今では随分と洗練された形で、筆者が何をしてきたのかについて語るができるようになりました。今回は導入的な講義ですので、その中でも比較的わかりやすい自己の影の統合に関わるものを取り上げて考察してみましょう。

### 第4節 仮面+影=自我

最初にひとつの実例を取り上げてみましょう。次にあげるのは皆さんの先輩のお一人が書かれた卒業論文の冒頭部分です<sup>1)</sup>。

他者と初めて出会った時その印象で、「この人は自分と合いそう—合わなさそう」、「この人は親しみやすそう—親しみにくそう」などと勝手に判断してしまい、「合いそう」、「親しみやすそう」と感じた相手とはコミュニケーションをとろうとし、「合わなさそう」、「親しみにくそう」と感じた相手とはそうしない。…そうではなく、人間関係の幅をもっと広げたいと感じたことはないだろうか。しかし、多くの色々な人と心地良くコミュニケーションをとりたいと思っても、なかなかそうできないと感じたことはないだろうか。

私はその原因を自分と他者との間に心のカベを作ってしまうためではないかと考えた。…言い換えれば、このカベを超えることができれば、多くの色々な人と心地良くコミュニケーションをとることができるのではないか。

この方は自分の中に存在する心の「カベ」ともいうべきものに関して、「カベとは何か」、「カベを作るのはなぜか」、「カベを超えるためにはどうすれば良いか」という三つの問いに答えるべく探究をされています。

ところで、この例のように自己と他者との間に存在する心の壁については、仮面と影の問題として理解することが可能です。たとえば、自分が誰か他人に対して怒りを抱えている場合、もし本人が「私は理性的な人間であり、怒りのような感情を抱くことはない」という自己感覚を抱いていると、その怒りは抑圧されます。しかし、怒りは抑圧するだけでは十分ではありません。なぜなら、それは意識の中で怒りの感情を対象化するだけでは、私はまだその怒りを感じているからです。しかし、怒りは自分のものではないとすれば、その怒りはどこへ行くのでしょうか。その抑圧された怒りという感情は、私以外の他者に投影されることになります。つまり、その人の意識の中では、怒りは自分の周りの他者の問題として現れてくるのです。

このような影は肯定的な場合もあります。その場合は、自分の素晴らしい性質はすべて他人の性質となってしまいます。周りの人がすべて素晴らしい人物に思える時、そして、そのような想いが常に自分を悩ませている時、本当はその素晴らしい性質は自分自身の中にあるものを周りに投影しているかもしれないのです。もちろん、私はすべてのケースがこうだと言っている訳ではありません。そうではなく、自分自身を見つめ、自分の周りで生じている心理的な闘いの在り方をこのような視点で考察してみることによって、今まで未解決であった苦悩に新しい光を当ててみる事が出来るのではないかと指摘しているのです。

とても図式化した説明ですが、これが抑圧と投影のメカニズムです。では、この知識を適用して私自身を考察してみましょう。かつて私は大講義をしようとする時必ず緊張してお腹が痛くなっていました。毎回そうでした。何故だろう。この図式に当てはめれば私の何らかの感情が抑圧され、それが他者に投影されるから、私は周りの人からプレッシャーを感じ緊張してお腹が痛くなってしまおうと理解することができます。

では、私はどのようにすればよいのでしょうか。周りから投げかけられていると感じられている本来は自分自身の感情を自分に取り戻せばよいわけです。では、プレッシャーとして感じられている感情とは何か。「周りの人間が私を見ている」ということで生じている緊張は、実は「私が周りの人間を見たい」という気持ちを抑圧して投影していることから生じているわけです。ですから、その好奇心という感情を自分に取り戻し、講義を始める前には必ず時間をかけて皆さんの顔をじっくりと眺めてから始めることにしたのです。すると私のあがり症とそこから生じる緊張、さらに腹痛は嘘のようになくなりました(笑)。

さて、このように本来は自分の意識の中で生じていることを分離し他人に投影すると、自分はそのような性質を持たない人間として感じられるようになります。怒らない自分と怒っている他人。しかし、本当に怒っているのは自分自身なのです。

この問題に関連して、私たちの職業には特定の性質だけを期待されるものがあります。たとえば、警察官や消防士のような方に「万引きです」、「火事です」と訴えた時、「いま私たちは疲れているから後で対処しますね」という返事が返ってくることはまずあり得ず、社会的に期待されている応答、つまり犯人を捕まえ、消火活動をして下さると思います。

このような社会的役割を一種の仮面(ペルソナ)として理解することも可能です。仮面とは本来その役割に応じて自由に取り外すことのできるものです。そして、これがあるから社会的役割を円滑

に果たすことが可能になります。しかし、もしも特定の仮面を被ったまま取り外すことができなくなってしまったらどうなるでしょうか。

たとえば、私が非常に厳格な小学校の校長先生であったとしましょう。学校では児童や同僚を厳しく管理し、常に指導しており、それゆえに熱心で良い校長であると評価されていたとしましょうか。しかし、もし私が自宅に帰ってからも校長という仮面を取り外さず、妻やわが子を厳しく管理し指導し続けていたらどのようなになってしまうのでしょうか。おそらく家族は「お父さんではなくて先生みたい。これはたまらない！」ということになってしまうかもしれませんね。また、当人にとっても、職場でも家庭でも気が休まることができなくなり、本来の自分はこんなはずではなかったのに、ということになってしまうかもしれません。

このように投影のメカニズムは、仮面と影の物語として理解することも可能です。私が仮面に取り憑かれ覆いを取り外すことが出来なくなった時、私の周りには私の生きられていない反面である影が現れてきます。もちろん、そのことを自覚しており、自分の意識の中にその両方を抱えることができているならば何の問題もありません。

これを今「仮面+影=自我」と表してみましよう。すると、私たちは自己の仮面と影を統合してはじめて、仮面に取り憑かれず、影を他人に投影したりもせずに、それらを自らの意識の中で統合している健全な自我になることができます。自我という言葉だけでなく、仮面や影も専門用語として使用する場合には、学問領域やその中のさまざまな学派により異なる意味を担っていますから、その使用には誤解がないように慎重を期すことが必要です。ここでは比較的単純に、自らの意識の中で、仮面は自分自身であると同一化している部分、影は分離して他者に投影している部分、そして、自我はそれらを包摂しつつ超えて統合している部分としておきましょう。

## 第5節 自我+身体=実存

さて、このように考えると超越とは、これまでの自分と対立するものを自覚し、それを包摂しつつ超えていく自己を生成することを意味します。つまり、この意味での教育とは拡大する意識生成の援助ということができるかもしれません。

それでは、仮面と影を統合した自我と対立するものとは何でしょうか。それは身体ですね。心身二元論を唱えて心と身体を分裂させた責任者のように言われるデカルトですが、実は心理健康領域においてこの二つをはっきりと分けてしまった責任の一旦は、フロイトに帰されるかもしれません。良く知られているフロイトに関する大きな誤解には二つのことがあります。

一つは、「イドあるところに、エゴあらしめよ」というかたちで、精神分析による治療の目的を表現することがありますが、実は、フロイト自身はラテン語のイドとかエゴを一度も用いていません。それはすべて英訳者の責にあります。彼自身は「それ（エス）があるところに、私（イッヒ）がいるべきである」こと、つまり、自分が疎外され分離されている時には、「それ」が「私」であることを明らかにすることの必要性を教えたのです。

そして、もう一つはそもそも「イド」と呼ばれるそれ（エス）は、バーデンバーデンの医師グロデックに由来するものであり、彼はフロイトへの最初の手紙の中で、以下のように記しています<sup>2)</sup>。

こころとからだの区別は単に言葉上の区別であって、本質的な区別ではなく、からだところとはひとつの共通の何かであり、そこにはエスが、私たちみずから生きていると信じているにもかかわらず、じつは私たちがそれによって生きられているようなひとつの力が、隠れているのです。

ですから、グロデックのそれ（エス）は、本来、自我と身体を分離する以前の存在であり、フロイトがそれを私とは分離した存在にしてしまったとも言えるわけです。

では、自我と身体を包摂しつつ超えているものとは何でしょうか。いきなりそれを唯一なる生命（いのち）ということも可能かもしれませんが、しかし、私はそのような根源的なものへ辿り着くまでに幾つかの包摂関係・場所的関係・ホロン（全体が何かの部分であるもの）を仮定しています。したがって、いきなり生命（いのち）にまでは飛躍せず、自我と私を包摂しているもの、その場所的存在、ホロンを「実存」と呼ぶことにしています。これは現代心理学の人間学派や実存学派の理論家や実践家であるパールズ、ロジャース、メイ、ジェンドリン達の学問的業績を踏まえたものです。たとえば、メイは以下のようなことを述べており、この問題の核心を把握していました<sup>3)</sup>。

複数の自我からなるこういった自我像が現代人の断片化を反映していることに異論があれば、あらゆる断片化の概念は、当の断片化の基になる何らかの統一体を前提していると応えよう……。論理的にも心理的にも、自我—イド—超自我システムの裏面を探索し、それらの表現の基となる〈存在〉を理解するよう努めなければならない。

さて、先に示した公式にならってこの問題を整理すると「自我+身体=実存」と表現することができます。では、この実存が分裂する危機とはどのようなもののでしょうか。それこそが近代教育の生み出した危機とも深く関わることになると考えていますが、この点は別の機会に詳しく考察していくことにしましょう。

## 第6節 二つの論理と二つの知性

ここまで教育における超越とは、神や絶対者の問題でも超越論的方法の問題でもなく、人間が自己の限界を自覚し、それを乗り越えていく際の自己生成の問題として語る事が出来るのではないかと話ししてみました。少なくとも、私とそのゼミナールの受講生にとっては、自己の理解・癒し・再生についてのテーマは、紛れもなく超越の問題であったように思われます。皆さんは、どのようにお考えになるのでしょうか。ぜひ、また忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

さて、今日の講義の後半は少し趣を変えて、そのような教育場面での自己超越に関わる際の「論理」や「知性」の在り方について考察してみたいと思います。と言いますのも、体験的人間学などと呼称すると、何でもかんでも自らの主観的な体験に基づいて話をする前近代的な愚か者のように言われることがしばしばあるからです。基本的に他人から誹謗中傷される事には、催眠や瞑想を研究テーマの一部に取り入れて以来慣れているとはいえ、やはりそこには大きな誤解が生じているようです。

まず、これまで皆さんは、学問というものが合理的・理性的なものであり、それを支える論理も当然そうでなければならず、必然的に研究論文やレポートもそのように書くべきであると学んで来られたことと思います。しかし、少し立ち止まり、そもそも「論理」とは何であるかということ調べてみられたことはあるでしょうか。一度、哲学や思想の事典を引いてみてください。

論理に関する体系的な研究は、古代ギリシアと古代インドにおいて、それぞれ独立して開始されたことが知られています。現代多く研究されているのは古代ギリシアに由来するものですから、私たちの論理に関するイメージもそれに則って形成されています。つまり、基本概念と基本前提を提示し、その後の概念の定義や論証は、この基本セットに基づいておこなわれていくのが普通ですね。ですから、皆さんの先生は、まず「概念を正しく詳細に定義しなさい」とご指導されるはずで、もちろん、私も入門講義ではそのように教えています。

ところが、今から二十年前に二人の恩師に新たな教育人間学を創るという仕事に誘われました。二人のうちのお一人は「好きなことをすれば良い」と仰っていましたが、他のお一人からは「それまでの仕事は忘れて、一からこの仕事をやってくれ」と託されました。周りを見渡してみると、他の誰もが前者の立場を取られているようで、気がつくとその枠から投げ出されて放置されているのは、「時代の要請に応え得る新たな学問を創出する」という言葉に魅力を感じて全国から集まった志の高い多くの学生諸君と私だけでした。そのとき私には二つの選択肢があったと思います。その理由はここでは明かしません、私は後者を選びました。つまり、私は専攻を主観的に体験するためにその内面に同一化して、専攻を客観的に外面から見る立場へと脱同一化することはしませんでした。

その時から、私のエネルギーは「いかにして新たな学問を生成するのか」ということに集中し始めました。その時までの知識で、新しい学問が誕生する時には、その対象と方法が明らかにされなければならないことを知っていました。後に、教育や人間や意識に関する研究では、その動機も非常に大切であることを知りましたが、今はその議論には入りません。そして、対象は提唱者たちによって、「教育・人間・意識（心）」と既に決められていましたので、それらを新しい方法で探究することが私の当面の課題となりました。

そこで、まず、物事を明らかにする知性と論理の問題に行き着いたわけです。やっとな、話が戻りましたね（笑）。

調べてみると、古代ギリシア由来の論理とそれを背後で支える知性は、既に私たちには馴染みのものでした。皆さんも、ライティングの授業を通してトレーニングを受けていることと思います。しかし、古代インド由来の論理に関しては全く馴染みがないと思います。ところが、これも後に気がつくのですが私たちの日本文化のなかには意外に多くのインド由来の論理が浸透しているのです。この点に関しても、後の講義で触れてみましょうね。

さて、インドにおける論理を調べた時に、最も私の関心を引いたのが、その知性の在り方でした<sup>4)</sup>。

その手がかりはインドで古来哲学を意味する言葉として使われてきた「ダルシャナ」にある。ダルシャナは、「見る」という意味の語根「ダル」を持つ言葉で、「哲学」の他に、「見る」あるいは「見える」という意味も持つ。この言葉にそのような二つの意味があるのは、インドでは哲学は見ることの一種と考えられているからだ。……真理の理解に達するには、理性を使うより、見る能力（アーンヴィークシキー）を磨いて、現実のありのままの姿を直接認識する（サークシャートカラ）必要があるという。

さて、このような二つの知性の在り方を、私たちの専攻ではどのように教学に活かしているのでしょうか。私たち教育人間学専攻の教員は、研究入門の授業を合同で担当しているのですが、心理健康領域の担当教員は『学校への手紙』をテキストにしています。これはインドの哲人クリシュナムルティが自己に深く関わる英国、インド、米国の学校に宛てて二週間に一度書いた手紙を集めたものです。彼を神秘化することなく、一人の教育者として取り上げ、その思想を批判的に検討する授業を展開しているのですが、このテキストの中に、二つの知性の在り方が比較されながら取り上げられています。

私個人の印象では、クリシュナムルティはインド出身であるためか、知識や推論を中心とする合理的知性よりも、洞察や直観を中心とする直観的知性を重視するように感じられるのですが、とにかく学生諸君は、彼の以下のような言葉を通して、直観的知性の在り方を知識として学びます<sup>5)</sup>。

精神の開花の意味や結果についての、〈言葉によらない理解〉を扱っているのです。この〈開花〉というのは、精神や心情や身体とのあいだにどのような対立も矛盾もない、完全な調和のなかに生きるということです。客観的で、個人的でない、どのような負荷もない澄みきった知覚があってはじめて、精神が開花するのです。それは「何を考えるか」ということではなく、「どのように明晰に考えるか」ということです。

これまで合理的知性の論理に慣れ親しんで来た学生は、当然「言葉によらない理解」や「客観的で、個人的でない、どのような負荷もない澄みきった知覚」などが何を意味しているのかに戸惑っています。

しかし、二回生、三回生と学年が上がるにつれて、高校までの学びではあまり馴染みのなかった直観的知性の在り方が、実は、「洞察」や「Aha 体験」として現代心理学でも研究されていることを知ります。また、さまざまな実習科目を受講することで、それが実際にはどのように体験されるのかを自らの心と身体を通して学びます。

ここで、大切なことは、このような二つの知性は人間存在にとってどちらも必要な機能であり、大切なことは各自が二つを自らの力で統合することだと思います。

## 第7節 二つの知性はいつ生じるのか

次に、このような二つの知性がいつ生じるのかについて見ていきましょう。皆さんのなかで教職科目を受講している方はいらっしゃいますか。ちょっと手を挙げてみて下さい。何人かはいらっしゃいますね。その方々にとっては既に学ばれていることと思いますが、人間の認知の発達はいくつかの段階に分けて考えられることが多いですね。

スイスの心理学者ピアジェによる業績は、どの教育心理学のテキストにも載っていると思います。皆さんも一度は「感覚運動期」「前操作期」「具体的操作期」「形式的操作期」という用語を聞かれたことがあると思います。彼の認知発達理論によれば、最後の段階である形式的操作期になると、子どもは具体的な事物と同様に抽象的な概念の内的表象の操作に堪能になり、大人と同じようにさまざまな概念を扱うことが可能になります。つまり、この段階が推論的知性が生じる時期と言うこと



ができると思います。

では、直観的知性はいつ生じるのでしょうか。これはなかなか興味深い問題です。実は、私自身が大学院の時に取り組んだのがこの問題でした。その成果はいくつかの拙稿で公表しましたが、現時点での私の見解は、形式的操作期で生じた抽象的思考を俯瞰して眺めることができるようになった時ではないかと考えています。もちろん、自らの内面に肉体の感覚、肉体に由来する衝動、その充足から生じる快・不快の感情、内的な言葉などには、形式的操作期以前から気づくことができるかもしれません。しかし、そのようなあらゆる内面的現象をモニターしコントロールすることのできる合理的・理性的自我が生まれないうち、それを包摂しつつ超えている知性は生じないのではないのでしょうか。

もちろん、これは単なる仮説ですから、ここで明確な結論を述べることはできません。皆さんの中でこのようなテーマに関心を持っていらっしゃる方は、ぜひ自分で関連文献を検索し考察を深めて下さい。

ちなみに、教育人間学専攻ではカバットジンによって提起された方法にしたがって、味覚、呼吸、身体、思考や感情、気づきそのものを対象として「意志を持ってこの瞬間に注意を払い、自分で評価をくたさない」というマインドフルネスの実習を取り入れています。しかし、この点に関しても、そのような気づきを訓練によって深めることに懐疑的なクリシュナムルティのような人物もいます。これも最終的には皆さん自身が体験的に検証してみることが必要だと思いますので、私の見解を皆さんに押し付けるようなことは控えたいと思います。

## 第8節 おわりに

さあ、それではそろそろ時間も押してきました。今日のまとめに入りましょう。今回の講義の前半では、「超越」に関して、宗教や哲学の観点からではなく、教育的な観点からの考察の可能性を考えてみました。そして、それは自己の限界を超えて、より大きな自己を実現するための方向性に求めてみました。その一例として、仮面と影の統合についてお話してみました。また、後半では二つの論理と二つの知性の在り方について考えてみました。これらについて皆さんがどのように受け止められ、考えられたかを皆さんの感想や意見としてコミュニケーションペーパーに記して下さい。

なお、今日の講義の中で触れた宗教や哲学に関連する項目は、丸善の『宗教学事典』<sup>6)</sup>と岩波の『哲学・思想事典』<sup>7)</sup>を参照しています。事典類は執筆者によってもさまざまな個性がありますから、皆さんも図書館などで自分の目で納得のいくものを探し、手元に置いて学んで下さい。

また、仮面、影、自我、実存などの用語も理論家ごとにより異なった意味をもたせて使用しています。ここでは、ウィルバーの『無境界』<sup>8)</sup>を応用しながらお話をしてきましたが、この問題に関心を持たれた方は、ぜひ他のフロイトやユングなどのテキストにも触れて、さらに学習を深めてみて下さい。

それでは、今日はここまでにしておきましょう。皆さん、お疲れ様でした。

(終了のチャイム)

本稿の終わりにあたり、筆者の山本先生との個人的なエピソードを記してみたい。筆者が山本先生からかけて頂いた言葉で今も鮮明に脳裏に焼き付いているものがある。それは、「福原さんは僕の影だから」というものであった。本稿の前半部はそのことを考えながら執筆していた。そして、書きながら、次のような洞察が生じた。

それは山本先生の仮面が専攻という枠組みの外側に同一化されていたのに対して、筆者の仮面はその内側に同一化していたのではないかということである。人間の自我が自らの影を統合する時、それをマインドフル瞑想のようにただ客観的に眺めているだけでは統合を果たすことが出来ない。なぜなら、まず影として排除している部分と同一化してからでなければ、そもそも超越する自我になることはできないからである。その意味で、この種の瞑想形態は心理療法が明らかにしてきた智慧を取り入れなければならないであろう。

山本先生の存在感が、ある時を境に筆者にとりまったく変容した時期がある。おそらく、それは先生が教育人間学会の大会会長をなさった後ではなかったかと記憶している。そのとき以来、先生の仮面は常に外からの立場を崩されなかったにもかかわらず、なぜか筆者には先生が常に内からも暖かく支えて下さっているように感じられるようになっていた。おそらく先生は、私よりも早く深く、専攻の外と内という境界を超越された境地に立たれていたのだと推察する。

今回の執筆を通してそのことを洞察できたことにより、これまでずっと「本体（山本先生）が退く時には、当然、影（福原）も消えるべきである」という筆者の中に鳴り響いていた誘惑が終息した。筆者も先生に倣い、内（仮面）から脱同一化して、外（影）との同一化を成し遂げた後、両方を包摂しつつ超えながら自由に遊べば良いのだと、無言の教えを受けられたからである<sup>9)</sup>。

「水自茫茫花自紅」を無我性の具体とする「自己ならざる自己」が自己として現れると、人間世界に自己展開し、それは自（おのずか）ら他己をして真の自己に目覚ましめる道となる。しかも他者が自（みずか）ら目覚めるという仕方である。

これは、上田閑照・柳田聖山（共著）『十牛図』の中の第十図に関する記述である。筆者は、影を公案としつつ、山本先生ならぬ山本先生を通して、この図に描かれた体験を与えられたのだと思う。

山本先生、ご退職おめでとうございます。また、長い間ありがとうございました。本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 山本雅美「カベの超越」『教育人間学専攻福原ゼミ卒業記念論文集』二〇〇五年
- 2) ゲオログ・グロデック、野間俊一『エスとの対話 心身の無意識と癒し』新曜社 二〇〇二年
- 3) ロロ・メイ『愛と意志』小野泰博訳 誠信書房 一九七九年
- 4) ジュリアン・バジーニ『哲学の技法 世界の見方を帰る思想の歴史』黒輪篤嗣訳 河出書房新社 二〇二〇年
- 5) クリシュナムルティ『学校への手紙』古庄高訳 UNIO 一九九七年
- 6) 平山孝裕「超越と内在」星野英紀・池上良正・氣多雅子・島蘭進・鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』丸善 二〇一〇年
- 7) 吉田夏彦「論理（学）」『哲学・思想事典』廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士（編）岩波書店 一九九八年
- 8) ケン・ウィルバー『無境界』平河出版社 一九八六年

9) 上田閑照・柳田聖山『十牛図』筑摩書房 一九九二年

(本学文学部教授)